

ペ・キエフスキーの論文全体には根本的な疑惑がきわだっている。それは、発展全体が諸民族の融合の方向へすすむ以上、なぜ民族の分離の自由を宣伝し、——われわれが権力をにぎったあかつきには——それを実現するのか、という疑惑である。これにたいして、われわれは、つぎのようにこたえる、——それは、発展全体が、社会の一部分にたいする他の部分の暴力的な支配を廃絶する方向にすすんでいるにもかかわらず、われわれがプロレタリアートの独裁を宣伝し、権力をにぎったあかつきには、この独裁を実現するのと同じ理由からであると。独裁とは、社会の一部分が全社会を支配することであり、しかも直接に暴力に依拠して支配することである。徹底的に革命的なただ一つの階級としてのプロレタリアートの独裁は、ブルジョアジーを打倒し、彼らの反革命的な企図を撃退するために必要である。プロレタリアートの独裁の問題は非常に重要であるから、独裁を否定するか、口さきだけでそれを承認する人は、社会民主党员ではありえない。しかし、個々のばあいには、例外として、たとえば、すでに社会革命を遂行した大国家の隣のある小国家で、そのブルジョアジーが反抗しても無益だと確信し、首がつながるほうをえらぶなら、彼らが権力を平穏的にゆずりわたすこともありうるのを、われわれは否定するわけにはいかない。もちろん、それよりもはるかに予想されることは、小国家においても内乱なしには社会主義が実現されないだろうということである。だから、われわれの理想のうえでは人間にたいする暴力はゆるされないとはいえ、内乱を承認することは国際社会民主主義運動のただ一つの綱領でなければならない。同じことは—— *mutatis mutandis* (適当な変更をくわえて) ——民族にもあてはまる。われわれは、民族の融合に賛成だが、分離の自由なしには、**こんにち**、強制的な融合から、併合から、自発的な融合へうつることはできない。われわれは経済的要因の優越をみとめる——しかもまったく正当にみとめる——、しかし、それをペ・キエフスキー流に解釈することは、マルクス主義の戯画に陥ることを意味している。発展した資本主義のもとでは一様に避けられない、こんにちの帝国主義のもとでのトラストや銀行でさえ、国が異なれば、具体的な形としては同一ではない。まして、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツのような先進の帝国主義国の政治形態は、だいたい同質であるにもかかわらず、なおさら同一ではない。このような多様性は、人類がこんにちの帝国主義からあすの社会主義革命へすすんでいく道の上にも現れるであろう。すべての国民は社会主義へ行きつくであろう。それは避けられない。しかし、すべての国民がまったく同一のやり方で行きつくとはかぎらない。それぞれの国民は、民主主義のあれこれの形態に、またプロレタリアートの独裁のあれこれの変種に、また社会生活のいろいろの側面の社会主義的改造のあれこれの速度に、独特なものをもたらすであろう。「史的唯物論の名のもとに」、この点で未来を灰色がかった一色でえがきだすほど、理論的に貧弱で、実践的にこっけいなことはない。これはスズダリ〔の聖像画家〕式のぬたくり絵であって、それ以上のものではない。社会主義的プロレタリアートが最初の勝利をおさめるまでに、解放され分離するのがこんにちの被抑圧民族の五〇〇分の一にすぎず、社会主義的プロレタリアートがこの地球上で最後の勝利をおさめるまでに (すなわちすでに開始された社会主義革命が幾多の転変をとげるあいだに) 分離するのが、同じく被抑圧民族の五〇〇分の

—にすぎず、それもほんのしばらくの間であることを現実がしめすようなばあいさえ—
—そういうばあいでさえ、抑圧民族の社会主義者ですべての**被抑圧**民族の分離の自由を承認せず、またそれを宣伝しないものを、われわれがもういまから自分たちの社会民主党に寄せつけないように労働者に勧告するのは、理論的にも実践的＝政治的にも、正しいことであろう。なぜなら、民主主義の**形態**の多様性と社会主義への移行の**形態**の多様性とにささやかな寄与をするためには、被抑圧民族のどれだけのものが分離する必要があるかを、われわれは実際のところ知らないし、また知ることもできない。しかし、われわれは、こんにち分離の自由を否定することが、はてしない理論的虚偽であり、実際には抑圧民族の排外主義者にたいする奉仕であるということを知っているし、毎日のように見たり、感じたりしているからである。

第 23 卷 P70~72 『マルクス主義の戯画と「帝国主義的経済主義」とについて』

1916 年 8 月～10 月執筆